裏切り

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
裏切り

【Ｎコード】
Ｎ０４５３Ｅ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
ヴリトラは生れ落ちたその時から憎しみしか知らなかった。しかし倒したインドラに兄と言われ美しい女を妻と持って他の感情も知った。だが彼の末路は。インド神話を逆の視点から書いてみました。

第一章

裏切り

一つだけ知っていることがあった。憎しみだけを。
彼はただ憎しみにより生み出された。生み出したその仙人は生まれた彼に対して告げた。ただ憎めと。
「憎むのだ」
「憎む」
「そうだ」
歪んだ顔での言葉だった。その顔と声が彼が最初に感じ取ったものだった。
「何もかも憎み、戦うのだ」
「戦う。誰と」
「御前が戦うのは神だ」
「神？」
「そう、インドラという」
今度は彼が戦うべき相手を教えられた。
「インドラを倒せ。そして世界を荒らせ」
「荒らす。憎む」
「御前は既にそれを知っている」
こうも言われた。
「わかるな」
「・・・・・・わかる」
何故かそれがわかった。それはどうしてか彼にはわからなかった。だが彼を造ったその仙人にはわかっていた。そういうように彼を造ったからだ。
「憎み、そして荒らす」
「そうだ」
「そのインドラも倒す」

「ならば。御前が為すべきこともわかるな」
また彼に対して問うてきた。闇の中で言葉とその歪んだ顔だけが見える。目も禍々しく吊り上がりそれもまた彼の心に刻み込まれた。
「わかった。ではインドラを倒す」
「そうだ。倒せ」
「そしてこの世の何もかも。荒らし尽くしてやる」
本能からその言葉を出した。彼は自然とその感情を言葉に出すのであった。
「俺のこの力で」
「では立て」
立ち上がるように言われた。
「そしてインドラを倒し世界を荒らすのだ。いいな」
「・・・・・・わかった」
彼はその言葉に頷いた。そうして早速世界を荒らし何もかもを破壊した。竜に似た尾を持ち人と竜に似た醜い顔を持つ巨大な彼を人も神も障害と呼んだ。即ちヴリトラと。こう名付けられた。
ヴリトラは全てを破壊し大地を割り河も海も汚し星達を落とした。月も太陽も遮り世の中を混乱に陥れた。これを受けて神々も遂に動いたのであった。
「ヴリトラは私を最も憎んでいるのだな」
「そうだ」
「貴殿をだ」
神々は自分達の宮殿において茶褐色の肌に同じ色の燃え上がる様な髪の毛を持つその神に対して答えた。この神の名はインドラ。神々の中の軍神である。無論神々の中では勇者として知られている。
「わかった。では私が行こう」
「ヴリトラを倒すのだな」
「その通りだ」
他の神々に対して当然といった様子で答えた。
「あの者が私を最も憎んでいるのならな。それに」

「それに？」
「私は戦いの神だ」
その言葉には絶対の自信が込められていた。
「このことにかけて誓おう。私は必ず奴を倒す」
「必ずか」
「そう。何があってもだ」
その黒い目が燃えていた。だがその炎は赤いものではなかった。
黒い炎であった。その黒い炎をたたえながら他の神々に対して言うのだった。
「私は勝つ。必ずな」
そう言って出撃した。その手には彼を象徴する武器であるヴァジュラがあった。それでヴリトラを倒すつもりだった。彼は勝利を確信していた。しかし。
何とそのインドラが敗れたのだ。ヴリトラの巨体と怪力には彼をもってしても勝利を掴むことはできなかった。彼は無様にその身体を横たえるだけであった。
「御前、弱い」
「何、私が弱いだと」
「そうだ」
侮辱され怒りで顔を歪めながらその顔をあげてきたインドラに対して答える。
「御前神々の中で一番強かった筈。その御前が弱かった」
「まだ私を愚弄するというのか」
「弱いのは本当のことだ」
彼はまた言う。
「呆気ない。俺御前を倒す為に作られた」
「私をだと・・・・・・」
「その御前が弱かった。俺もう怖いものない」
こうまで言ってみせてきた。これはインドラにとってはこの上ない侮辱であった。だが敗れ地に伏すインドラにこれをどうこうする

ことはできなかった。彼は敗れたのだから。敗者に勝者をどうこうすることはできる筈もなかった。
　インドラの敗北を受けて神々はまた話し合いの場を持った。彼等は苦渋に満ちた顔で話し合う。その結果ヴリトラと和平することになった。
「それしかないか」
「そうだ。だが条件があるそうだ」
「条件だと」
　神々の一人が同僚の言葉に顔を上げた。そのうえで問う。
「そうだ。その条件はインドラが彼に謝ることだ」
「馬鹿な」
　神々はそれを聞いて驚きの声をあげた。彼等もインドラのことはよく知っている。何しろ同じ神々の一員だからだ。
「あのインドラが膝を屈するなぞ有り得ない」
「ヴリトラめ。何を考えて」
「だがインドラは敗れた」
　これは紛れもない事実であった。
「それではインドラもどうこうも言えまい」
「それはそうだが」
「だからだ」
　神々の一人はここでまたヴリトラの言葉を伝えるのであった。
「インドラが彼への憎しみを捨てて膝を屈するのなら」
「それでいいのか」
「それとインドラの土地の半分を欲しいという」
「土地もか」
「そうだ。そこまで渡してくれるのなら喜んで和平に応じようというのだ」
　そのことまでも彼等に伝えられた。
「これをインドラに話して受け入れてもらうか」
「それしかないか。しかも幸いなことに」

インドラは敗れている。敗者は何も言えない。そうした事情もあった。様々な事柄があってインドラはヴリトラに膝を屈することになった。彼は屈辱にその身体を震わせながらもその話を受けた。受け入れるしかなかった。

第二章

ヴリトラはインドラの宮殿に招かれた。その豪奢で多くの美女と財宝に満ちた宮殿の中に招かれた彼は最初そのみらびやかさに心を奪われた。その中でもとりわけ美しい、黒い肌に見事な容姿を持つ美女に見惚れた。はっきりとした黒い大きな瞳に高い鼻と大きな唇を持っている。黒い髪が波がかっていた。

「あの奇麗な人は」

ヴリトラはまず彼女のことを居並ぶ神々に問うた。

「誰。凄く奇麗だ」

「兄上」

インドラがそれに応えた。今かれはヴリトラを兄と呼んだのだ。ヴリトラもそのことに気付いた。

「兄？俺が」

「そうです」

にこりと笑ってヴリトラに対して答えた。

「私は是非貴方の弟になりたいのです」

「俺の弟に」

「いけませんか」

恭しく彼に問う。

「貴方の弟になりたいのですが」

「俺、兄弟なんていなかった」

ヴリトラはインドラの言葉に答えずにまずはこう呟いた。今はみらびやかな宮殿も美女も財宝も目に入らない。磨き抜かれた宝玉の廊下には自分の顔が映っている。その醜く巨大な顔が映っている。

「憎むだけ。いつもたった一人だった」

「これからは違うのです」

インドラは彼に囁くようにしてまた述べた。

「私が貴方の弟となるのですから」

「俺、一人じゃなくなる」
「そうです」
彼はまた言ってきた。
「私が弟になります。そして」
「そして」
「生涯の友人となりましょう。いけませんか」
「俺、さっきも言ったけれどずっと一人だった」
ヴリトラはそのことをまた言う。
「一人でずっと生きてきた。友達なんて知らなかった」
「これからはそれも違うのです」
またしても甘い蜜をかけるようにして囁く。
「私がいますので」
「インドラがいる」
ヴリトラの顔に彼が今まで見せたことのない、浮かべたことのない感情が浮かんだ。
「インドラがいる。友達がいる」
「はい、そして弟が」
「俺はもう一人じゃない。一人じゃないんだ」
「貴方は憎しみから解き放たれたのです」
また囁いてきた。
「これからは永遠に。幸せの中で生きるのです」
「幸せ。今まで俺が知らなかったもの」
憎しみにより生まれて憎しみしか感じたことのない彼が幸せなぞ感じたことがあろう筈もなかった。彼は笑いさえ知らなかったのだから。
「それが俺のものとなる」
「そうです」
インドラの囁きは続く。
「それで兄上」
「うん、弟」

これも今まで持ったことのない感情であった。それは親しみというものである。笑いも幸せも親しみも今彼ははじめて知ったのだ。
「あの美女が御気に召されたのですか」
「それは」
「本当のことをおっしゃってもいいのですよ」
ここでも囁いたのだった。
「何しろ私達は親友同士であり兄弟なのですから」
「そうだった。それでは弟よ」
「はい、兄上」
「あの女は何というのだ？」
それをインドラに対して問うた。
「あの女の名前は。何と」
「ラムバーと申します」
「ラムバー」
「そう。アプサラスの一人でして」
水の精霊である。普通アプサラスはもっと清らかな色をしているのだが何故か彼女は漆黒である。しかしその漆黒の肌も髪も独特の光を放っており実に艶かしい。ヴリトラはその艶かしさにも心を奪われていたのだ。
「兄上に是非御会いしたいというのでここに呼んだのです」
「俺に」
これまたヴリトラには思いも寄らぬことであった。
「俺に。会いたい」
「そうです」
インドラはにこやかに笑って答えた。
「是非。貴方を夫にしたいと言っています」
「俺を。この俺を」
自分の醜い姿は知っている。だから妻なぞ持てないと思っていた。しかしその自分にあの様な美しい女が妻にして欲しいと言う。まるで夢の様な話であった。

「嘘ではないのか」
「いえ、嘘ではありません」
インドラはそれを否定した。
「あの者も是非貴方にと言っていますので」
「俺をか」
「兄上は妻を持っておられませんでしたね」
「いない」
彼は正直にその言葉に答えた。
「じゃあ。いいのか」
「はい、どうぞ。ですが」
しかしここでインドラは言葉を付け加えるのであった。
「一つだけ守って欲しいことがあります」
「守って欲しいこと」
「そうです。実はですね」
「何なのだ？」
インドラに対して問う。完全に彼を信用していて疑うことはない。しかしインドラの目はそんな彼を見ながら邪な光を放っていた。神に相応しくない光を。
「一つだけ。それはですね」
「それは。何なのだ」
「彼女の望みを全て適えることです」
「ラムバーのですか」
「それだけです」
そこまで言うと穏やかな笑みを浮かべてみせた。
「兄上があの女に誓われることはそれだけです」
「ラムバーの望みを全て適えるのだな」
「そうです。如何でしょうか」
「わかった」
彼はそれに迷うことなく頷くのだった。
「それならやる。俺のこの力は今まで憎しみの為にあった」

「そう、これまでは」
インドラの囁きはここでもヴリトラに対して向けられていた。

第三章

「ですがこれからは」
「そう、違う。ラムバーの為に使う」
そのことを誓う。これは本当の心からの言葉であり誓いだった。
「それでいいのだな、弟よ」
「はい、兄上」
目の奥の光をそのままにヴリトラを兄と呼んだ。
「ですから是非あの女を幸せにして下さい」
「わかった。では弟よ」
インドラを信頼しきって弟と呼び言うのだった。
「俺、ラムバーを妻にする。そしてその望みを全て適える」
「はい、そうして下さい」
こうして彼は兄弟と親友と妻を得た。友情と愛情も。少なくとも彼はそう思っていた。幸福を得たと思っていた。それまで彼が知らなかった全てのものを。彼は幸福に包まれ自分がラムバーの為に建てた巨大で豪華な宮殿で彼女と楽しく暮らしだした。しかしそれが真のものなのかどうか彼は疑ったことはなかった。全ての憎しみも怒りも何もかもをなくしていたからだ。かわりに幸福を得たのだと信じきっていたのだ。
そんな幸せに包まれたある日のこと。ラムバーと宮殿の奥の二人の部屋でそっと夫であるヴリトラに囁いた。穏やかな笑顔に艶を浮かべながら。
「御願いがあるのですが」
「何だ、妻よ」
ヴリトラは幸福に満ちて満足しきった顔を妻に見せて問うた。
「一つ御願いがあるのですが」
「御願いか」
ここでインドラの言葉を思い出した。彼女の願いは何でも適える

ということを。その言葉を心の中で思い出したのである。
「そうです。宜しいでしょうか」
「言ってみるといい」
彼はそれを妻に許した。笑顔のままで。
「何でも」
「わかりました。それではですね」
彼女は艶を込めた笑みに媚態を交えながら言葉を続ける。その艶と媚態で彼の心を捉えていくのを忘れていない。次第に彼を捉えていたのだ。
「お酒を飲んで欲しいのです」
「お酒をか」
「はい」
願い自体はどうということはないものであった。
「宜しいでしょうか」
「いい」
彼はその怖い顔をにこやかに笑ってみせて応えた。その醜い顔を好いてくれた妻に対して。妻を心から愛しているのを感じながらの応えであった。
「そのお酒を」
「わかった。ではその酒を」
「はい、こちらです」
ラムバーがさっと右手を艶然と上げるとそこに幾つもの巨大な瓶が出て来た。その瓶からは酒の濃厚な香りが漂っている。その香り、何よりもラムバーの微笑みと願いを適えるという弟であり親友でもあるインドラとの約束が彼の心を占める。そうして言うのだった。
「では飲もう」
「全て飲んで下さい」
ラムバーはこうも囁いた。
「是非共」
「うん」

ヴリトラはその言葉に頷くとすぐにその酒を飲みはじめた。巨大な身体を持つ彼は酒を次々と飲み干す。全て飲み干すとその瞬間に酔い潰れた。酒にも強い彼だったがその量の多さに負けたのである。不覚にも酔い潰れた彼はそのまま意識を失い倒れてしまった。

ラムバーはそれを微笑みと共に見下ろしていた。それまでの艶と媚態を含んだ笑みではなかった。冷酷でその目に映るものを見下す、そうした酷薄な笑みをその黒い顔に浮かべていたのであった。

彼女は上着の胸の間に手を入れるとそこから鈴を取り出した。その鈴をちりん、と鳴らすと部屋の中にインドラが入って来た。その手にヴァジュラを持ち残忍な笑みをたたえていた。

「よし、いいな」

「はい、もう起き上がることはありません」

ラムバーはインドラに対して残忍な笑みを浮かべながら答えた。

「ようやく私もこの汚らわしい男から離れられるのですね」

「今まで御苦労だった」

インドラはラムバーに対してねぎらいの言葉をかける。

「だがそれもこれで終わりだ」

「そうですね。それではインドラ様」

「うむ」

ラムバーに応えつつゆっくりと近付く。インドラのその巨体の前に。

「私も屈辱に耐えてきたかいがあった」

「それでは今までのは」

「芝居だ」

憎悪に満ちた目でヴリトラを見下ろしつつ言い捨てたのだった。

「何が悲しくてこの様な化け物を兄と思わなくてはならんのだ」

「その通りですね。この醜い怪物を」

「怪物は死ね」

冷然とヴリトラを見下ろしつつ言い捨てた。その手にあるヴァジュラが一際強い光を放つ。まるで雷の様に激しく、そして酷薄な光

を。
「せめて。精々その友情やら愛情やらを信じてな」
「身の程知らずにも程がありますね」
ラムバーはその惨い言葉を隠そうともしなかった。
「化け物だというのに」
「化け物に友情だの愛情だの幸福なぞ不要だ」
インドラもまたラムバーと同じ心であった。
「醜い奴には。そんなものはいりはしない」
「いるのは」
「憎しみがお似合いだったのだ。本来貴様が生まれたその世界がな」
ここまで言うとヴァジュラをヴリトラの額に振り下ろした。ブリトラは信じ、愛した者達の心を知ることなく息絶えた。後には彼の亡骸を見下ろし唾を吐きかけるインドラとラムバーがいた。
彼が死んだのを確かめると二人はその宮殿に火を点けた。ヴリトラの亡骸は業火の中で燃え尽き骨一本も残らなかった。
後に残ったものは彼が信じていた友情と愛情、そして幸福だけであった。それに裏切られたことを知らず。彼は死ぬまで己の中に芽生えたこの三つのものを信じていた。その三つに裏切られていたということには気付くことなく。最後まで信じていたのであった。

裏切り　　完

２００８・２・１８

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0453e/

裏切り

2010年10月8日15時04分発行